文化

「大立山まつり」について（下）

毎年新たに造形物作る

■県内の立山行事■

なら民俗通信 251

鹿谷 勲

前回の通信第250号で、新しく作られた「奈良大立山まつり」の疑似宗教性を指摘したが、さらにこの新規イベントの命名の元となった県内の立山行事との関わりについて考えてみたい。筆者は以前から立山行事に関心を抱き、不十分ながら現地調査も行ってきた。今ではあまり知られていないものの、奈良県に住む人々の感性が窺（うかが）える貴重な民俗行事だと思ったからだ。

■八木の立山

橿原市八木町では、毎年8月23日から25日までの3日間、「愛宕（あたご）祭り」が行われている。八木の愛宕講は、18世紀前半まで遡（さかのぼ）ることができ、火難除けの神として信仰され続けているが、町内ごとに愛宕講があり、この時期には当番の家などで祭壇が設けられ、供物が供えられ、大勢の人々で賑（にぎ）わいを見せる。

この愛宕祭りの呼び物が、「立山」（近年は造り山とも呼ばれる）で、通りに面した家の座敷などを借りて、その時の世相に応じた手作りの飾り物が披露される。「阪神猛虎」（2003年）、「ピーターパン」「ストップ地球温暖化」（2005）、「梅川忠兵衛」（2004年）、機械仕掛けで見事に再現した「阿波踊り」（2007年）の他、一寸法師が鉢の船に乗って川を漕ぐ姿に「小さなからだに大きなのぞみ　ニガッキからがんばろう」とメッセージが添えられたりしたもの（1982年）も見た。

「八木愛宕祭り」の立山＝2007年8月25日

常設の展示場を持つ高愛町では、楽天の田中投手と早稲田のハンカチ王子（斎藤投手）が、一つの回転板に乗ってゆっくり回る「愛宕球場」という夢の対戦が披露されたこともある（2007年）。立山は毎年新たに作り、次々と趣向が移り変わるものだった。（拙稿「八木の愛宕祭りと立山」『八木の歴史と文化』2010参照）

■広陵の立山

広陵町三吉大垣内では、毎年8月24日に「立山祭り」が行われている。これは地蔵盆に行われる立山だ。2014年は6カ所で行われ、「弁慶と牛若丸」の他、「花子とアン」や「黒田勘兵衛」など当時のテレビドラマを人形などで表現していた。

第二次世界大戦前は有志の手で行っていたが、戦後に青年団が引き継ぎ、現在では保存会を組織して行っており、人形の頭や手足が多数保存されている。もとは家の新築や嫁取り婿取りなどの慶事があったところを借りたといい、この立山で賑わう地蔵盆の期間に、嫁いだ者は藪入りしたという。

これら以外にも、御所市東名柄の天満宮では、7月の天神祭に立山が行われ、田原本町の祇園祭りや吉野町上市でも行われていた。

■ツクリモノ

祭礼における造形物がツクリモノ（造物・作物）だが、座敷などで固定的に展示されるものが多い。近世後期には、大坂・名古屋・金沢などで慶賀の奉納物として飾ることが流行し、その分布は大坂との物資の流通ルートに沿うように西日本に集中しており、その趣向は、即興性と当座性が重んじられる。「一式飾り」と呼ばれて、すべて同一の材料で表現する場合もある（西岡陽子「造り物の諸相」『祭りのしつらい』2008年）。

県内の立山行事も、大坂の流行の影響が想定できるが、「立山」と呼称しているところに独自の要素も考えられる。

江戸時代、奈良の薬師堂町の享保13年（1728）の祭礼で、練物・拍子・灯籠の他、「作人形」も出たというから、立山に類したものは近世の奈良町でも行われていたようである。

■住民主体の一回性の趣向

県内の立山行事は、「住民の機知と発想を手作りで表現する」というのが際立った特色で、住民主体で毎年新たに作るその年限りの行事である。世の中の流れを巧みに捉えて、小気味よく造形して、何よりも地元の作り手と鑑賞者の楽しみとして繰り返されてきたものだった。大規模で高価な作り物を、連年使い回しするようなものでは決してなかった。

また「江戸時代の頃から、奈良県内各地には『造りもの』を身代わりとして、降り懸かる厄を落とすという風習があった」と今回の大立山まつりの実行委員会は断定しているが、この「身代わり厄落とし」は何を根拠としての言説で、県内のどこの伝承だろうか。事務局に照会しても、残念ながら返事はもらえなかった。

その主体性からも、精神性からも、本来のものからかけ離れた大規模「新立山」行事が、本来の行事を誤解・変質させるものであってはならず、県民が長年にわたって育み、土地毎の工夫を凝らしてきた民俗文化を大切に取り扱い、保存顕彰する姿勢をまず持ってもらいたいと強く望んでいる。

（しかたに・いさお＝奈良民俗文化研究所代表）